

た労作である。著者は表題からも分かるように、徳川時代を労働と資本の地域間・産業間移動が極度に制限された封建社会であると考えている。そのあたりを中心に論評したいと考えているが、そのままに本書の構成をみておこう。

序文に代えて—学問的遍歴と回顧— 第一章 徳川封建体制と三貨制度 第二章 徳川時代の米価ならびに米穀流通機構—封建幣制としての三貨制度との関連において— 第三章 徳川封建体制における国家信用と商業信用(その一)—徳川後期盛岡藩の場合を中心として— 第四章 徳川封建体制における国家信用と商業信用(その二)—三善庸礼の所説を中心として— 第五章 徳川封建経済における手形流通 第六章 跋文に代えて—三貨制度と墨西哥銀—

本書の内容を構成順にしたがって要約すると、第一章では、徳川時代の独特の幣制である金銀銭の三貨制度について説明している。金貨は江戸を中心とする東国、銀貨は大坂を中心とする西国でおもに用いられ、両者はまったく排他的というわけではなかったがそれぞれ異なった流通圏をもっていた。一方で江戸-大坂間の取引もさかんで、それをスムーズに行うためにも両経済圏の通貨の交換相場(江戸の銀相場、大坂の金相場)が不可欠になってくる。著者は、この金銀相場は今日の外国為替相場ともいべきもので、金銀相場は金銀の品位・量目の変化よりも数量の変化によって大きな影響を受けると考えている。換言すれば金銀相場は金銀の実体価値を反映したものではなかったことになる。こうした事態をもたらした原因は、徳川封建経済の特質の一つである労働と資本の移動の自由が極度に制限されていたために、リカードの労働価値説やミルの生産費の法則が貨幣相場に妥当することを妨げられていたからであると、著者は考えている。

第二章では、元和期から文化期までの米価ならびに米穀流通機構を考察している。幕藩体制のもとでは、各藩は年貢米の流通を通じて商業とかわりをもたざるをえなくなり、それにとまって米穀流通機構は発達していった。幕府・諸藩にとって米価の動向は、財政と直結しているだけに極めて重要な問題であった。とくに米価の下落は財政赤字を招くだけに問題が大きく、それを回避するために種々の米価政策が試みられた。しかし米切手延売の公認、米価の法定、米商株仲間公認、廻米の制限、囲米、囲糶、買米令等の一連の米価政策は、所期の目的を

吉川光治

『徳川封建経済の貨幣的機構』

法政大学出版局 1991.2 xxvii+546 ページ

本書は徳川時代の貨幣・金融・物価について、多くの原資料を用いてその特質を明らかにしようとし

達成することができなかった。この失敗の一つの大きな原因は、諸藩が財政赤字の補填のために発行した過米切手・空米切手にあった。これらの切手は実米の裏付けをもたなかったために、財貨と通貨のアンバランスを招き、米価政策破綻の原因となったのである。だが著者は、過米切手・空米切手の発行は財貨と通貨のアンバランスにとって単に二次的な役割を果たしたにすぎないと考える。それでは元兇は何か？ 本章でも、幕藩体制が封建経済・収奪の経済として労働と資本の移動を地域間・産業間において極度に制限し、米の生産を流通から隔離したことこそが、アンバランスの元兇であると主張するのである。

第三章は、幕藩体制下の信用貨幣の一つである藩札について、盛岡藩の銭札を対象とする事例研究である。盛岡藩では、天保以降各種の藩札・預り切手が発行されたが、いずれもその価値は大幅に低落し、正金銭との引替も保証されず、藩札は収奪の貨幣として機能した。これらは藩財政の赤字補填のために発行された財政的通貨であり、その発行・回収・収縮の仕組みからして財貨の生産・流通とのバランスを欠いていた。他方、幕藩体制とは違って生産と流通の自由な市場機構が存在していた近代イングランドでは、同じ赤字補填の銀行券を発行しても、それはやがて財貨の生産と流通の裏付けをもつ流通経済的通貨に metamorphosed されたのである。この点においても、西欧市民社会と封建社会との間に明確な相違が存在することを著者は強調している。

第四章では、九州筑後柳河藩土三善庸札の紙幣論に関する所説の検討を通じて、著者は徳川封建体制の流通機構、再生産構造、市場構造を相互関連的に把握することに努めている。

第五章では、もう一つの信用貨幣である銀目手形について考察を行っている。徳川時代の大坂は領主的貨幣経済の結節点にあり、そこでの商品価格には市民社会に存在している自然価格が欠落していると著者は考えている。それゆえ大坂で発行された銀目手形は、市民社会におけるような財貨と通貨のバランスを確保するような仕組みの上に乗ったものではなかったとして、これまでの主張と同一の立場から論を展開している。最終章で墨西哥銀について考察がなされているが、興味深いトピックスではあるが紙数の関係上紹介を割愛させていただきたい。

以上の内容をもつ本書は、幕藩体制下における貨幣制度、米価、米穀流通機構の検討を通じて、徳川

封建経済と資本主義経済の相違を明確にし、われわれの経済理論が妥当するための前提条件を浮き彫りにしようとしたものである。まず本来日本経済史の専門家でない著者が、これだけ多くの原資料を渉猟・整理して本書を完成され、いくつかの興味ある論点を提示されたことに深く敬意を表したい。その上で最近の日本経済史の動向等とも関連させて評者の感じた点について述べてみたい。

著者は徳川時代を封建社会であると考え、その具体的様相として労働・資本の移動の制限をあげている。しかし徳川時代は著者が指摘するほど本当に移動の自由を極度に奪われた社会であったのであろうか。たしかに幕府・諸藩の法令の中に、農民の土地への緊縛を命じたものを多く見いだすことができる。しかしこうした法令が繰り返し出されること自体、それが必ずしも遵守されていないことの一つの証左であろう。さらに幕末の江戸においては、町人の約4分の1は他所出生者であった。歴史人口学の成果によれば、そもそも当時の都市は、絶えず市外からの人口流入によってやっとその人口を維持できる状態であったといわれている。また美濃の一農村では、11歳まで成長した者の内、男子は50%、女子は62%もの者が、生涯に一度は、この村を出て奉公を経験している。そしてこの村の状況がけって例外的なものでなかったことは、多くの歴史人口学・都市史研究の成果が示すところである。労働移動だけではなく、結婚・養子形態の移動を加えれば、移動量は飛躍的に増大する。徳川時代は明治以降に比べれば移動の自由度は低かったかもしれないが(それ故養子に擬制してその実、奉公を行うという脱法行為もみられたが)、土地緊縛というイメージとはほど遠いものであったことも事実である。資本についても、経営史・経済史の研究成果によって、資本が地域間・産業間で移動していることを知ることができる。そうであるならば、徳川時代は著者が考えているよりも、経済社会化が進展している社会であると見なすことも可能である。そうした観点から著者の論点のいくつかについて検討してみよう。

金銀相場が外国為替相場と同じ機能を果たしていたというのが著者の立場であり通説でもあるが、こうした見解についてはクローカ・ヤマムラが疑問をなげかけている。かれらによれば、18世紀後半以降、定位の計数銀貨の普及とともに大坂金相場は計数貨幣(金・銀)と銀目信用手段の交換比率となった。そして大坂両替商は、金相場の安定をはかるために

信用操作を行うこともあったというのである。いずれの説をとるにしても、まず金相場・銀相場の動向を把握することが大切であろう。しかもこうした研究分野はここ数十年めざましい発展をとげており、数々のすばらしい成果が発表されている。それによれば、幕末期には金銀相場の乖離が認められ、前者の立場からはやや説明困難な現象が生じている。同様のことは、藩札についてもいえる。藩札は、藩財政の赤字補填のために発行され、価値下落を招くことが多かったと著者をはじめ多くの論者が指摘している。勿論われわれも、そうした側面を否定するわけではないが、通貨不足を緩和するために発行されたという側面や札価は貨幣相場の変動に影響を受けたという見解も考慮に入れる必要があるのではないだろうか。つぎに物価の地域性について考えてみよう。著者は、徳川時代には一物一価の法則は成立しておらず、物価の地域差の存在に肯定的である。これについても最近の物価史研究によれば、明治以降の単一市場とは距離はあるとはいえ、米についてみれば全国市場的なものが徳川時代に登場しつつあったことが数量データの上で確かめられている。また年貢米流通にしても、貢納農産物の販売という性格を色濃く残しつつも、地域間の米価の動向や大坂の市況などに影響を受け、市場法則が介在していたことが明らかになってきている。

著者が本書で示された徳川時代像は、一つの立場を代表するものであるが、一方では明治以降の工業化のための条件がこの時代の中に形成されつつあったとする立場もある。徳川時代は、時期的・地域的多様性に富んでおり、一つの切口からだけではその真の姿をとらえることは到底できそうにない。幸い本書の公刊によって、二つの立場の出会いが実現したのであるから、今後この分野の研究水準がいつそう向上することを願ひ筆を擱きたい。

[松浦 昭]